

# 音楽により誘導された気分が、画像の印象と記憶に与える影響

越智 日向子

私たちの日常には音楽があふれている。ショップやレストランでの背景音楽、コンサートや医療現場など音楽は様々なことに使われているが、それは音楽が人の気分や感情的側面に影響を与えてその結果、人の行動や認知処理にまで影響を及ぼすからであると考えられる。私たちが音楽に触れる時は視覚刺激も同時に存在していることがほとんどであり、音楽や音楽により誘導された気分は少なからず視覚刺激に影響を与えている可能性もある。また先行研究より、視覚刺激の印象に対する感情的な強さは、記憶成績にも影響を及ぼすことが明らかになっている。

そこで本研究は、音楽を用いて気分を誘導することで画像の印象がどのように変化するかを検討すること、また画像の印象に対する感情の強さにより記憶の成績がどのような影響を受けるか検討することを目的とした。

本研究では参加者をいずれかの音楽条件(ポジティブ/ネガティブ/無し)に割り当てた。そして画像の種類(ポジティブ/ネガティブ)と画像提示方法(画像単独/音楽と画像同時)が画像の印象評価に与える影響と、画像の種類が画像の再認成績に与える影響を検討した。まず参加者にポジティブ画像とネガティブ画像の印象を評価させた(画像単独)。その3日後、ポジティブ音楽またはネガティブ音楽を用いて参加者の気分を誘導し、その後同じ音楽を流しながら同一の画像の印象を評価させた(音楽と画像同時)。その後、画像刺激の再認課題を行った。

音楽による気分の誘導に関しては、ポジティブ音楽条件では明るい気分を測定する評価項目の値が上がり、ネガティブ音楽条件では下がった。このことから人の気分はポジティブな気分がネガティブな気分よりも音楽からの影響を受けやすいこと、また音楽がもつ感情的特性に関わらず音楽による気分の変化は、人のポジティブな気分により大きく現れる可能性が示唆された。

画像の印象に関しては、画像を単独で評価した時と音楽を聴きながら評価した時で有意な差は見られなかった。しかし音楽による気分の誘導が成功した場合は、ネガティブ音楽条件において画像の提示方法の効果量が高くなった。この条件下において提示方法の違いによって画像の印象に差が生じるとするならば、ネガティブ音楽は画像の印象に関わらず、その印象を音楽の印象と同じ方向に変化させる可能性がある。また参加者全員を対象とした場合、ポジティブ画像の時に、その他の条件に比べてポジティブ音楽条件で画像の印象がよりポジティブに評価されたことから、音楽は誘導された気分とは関係なく、音楽がもつ感情的特性がポジティブな刺激に対してより大きく作用しうることも考えられる。

画像の記憶成績に関しては、音楽と画像の印象の一致条件、不一致条件、音楽無し条件間で再認課題の成績に差は見られなかった。再生課題を行った先行研究では条件間で差が見られたことから、再生は学習したものを検索してそれを照合するという2段階が必要であるのに対して、再認は刺激を照合するだけという両者の記憶のメカニズムの違いが影響したと考えられる。そのため音楽と画像の印象の一致または不一致の影響は記憶における検索の段階で生じる可能性が示されたと言える。

これらのことから映画やテレビ、テーマパークなどのエンターテインメントでは、聴覚刺激と視覚刺激の関係性を上手く利用することで人々の気分や印象に影響を与え、さらに人々を楽しませることができよう。(応用認知心理学)